

# 山鹿素行の教育論形成過程における「教育方法」の考察

——『修教要録』における教育方法論・教育課程論・学校論を中心に——

内 山 宗 昭

## (序)

山鹿素行（一六二二年～一六八五年）の教育論の形成過程に関する考察として、素行の明暦二年（一六五六年）の著作『修教要録』内の教育説と素行の当期の知見について、拙稿「山鹿素行の教育論形成過程に関する考察——『修教要録』における陶冶性論並びに学校・教師・学習論を中心に——」<sup>1</sup>では、素行のその後の教育論への展開の基盤としての観点から考察した。本稿では、『修教要録』の内、特に「力行三外編一」篇における「胎教・子を生む・子を教ふ・通じて子弟を教ふ」という、子どもとその教育の在り方を主に意図的に取り上げた記述を中心に、素行の子どもを対象とする教育方法論としての観点から、その考察を試みたい。この領域は、素行の古学期での教育方法論における子どもの発達を考量した特徴ある方法の土台に位置する領域である。内容的には、教育方法として方法の一環として教育課程論をも重要なものとして認識しており、教育の場と

としての観点としても、家庭教育論とそれに続く学校教育論までが扱われている。

## (一) 『修教要録』における「齊家」観とその教育論の位置

素行は、『修教要録』（明暦二年・一六五六年）の著作を「道源」篇・「学問」篇・「力行」篇として構成し、「力行」篇を、「義利」等を論じ「徳・才・志気」等の内面的な倫理と「主客応接」等の外在的倫理規範を挙げた上で、具体的な事例を「齊家」から「治国」に関わる諸事例として集成している。素行が子どもの教育論について「胎教・子を生む・子を教ふ・通じて子弟を教ふ」の項目として取り上げるのは、その「齊家」に位置する部分となっている。それが「力行」篇の三にあたる「外編一」で、「通論 父母姑舅に事ふ 子道 婦道 兄長に事ふ 男女の別 夫婦を謹む 胎教 子を生む 子を教ふ 通じて子弟を教ふ 通禮 冠笄 昏禮 喪葬 服制 祭

法 弔慰 後を立つ 相見 復仇」から成っている。<sup>2</sup>『修教要録』の特徴の一つである典拠主義による総覧的諸引用の集積という形式で、「齊家」に関わる諸慣例が例示されながら規範としての評価を与えるものとなっており、子弟への教育という観点を「齊家」の中で重視し、その事例はかくしたものであると示すことを意図している。古典の慣例は慣例通りに実践することを期待したものでないことは明らかであるが、その趣旨・目的・意義を汲み出すことを期待する意図があることは本書に一貫した姿勢と考えられる。<sup>3</sup>明暦二年の集中した著作の最初に位置する本書から、その約半年後に執筆される『武教小学』においては、この領域についての教育論として自論の展開が大いにみられるに至る。すなわち、「夙起夜寐 燕居言語応対 行住坐臥 衣食住 財宝器物 飲食色欲 放鷹狩獵 與受 子孫教戒」という「齊家」の関心を日本の武家の子弟教育への実践方法として翻案し、その中に「教育」をより明確に位置付け結びとしている。<sup>4</sup>さらに、素行の教育論形成過程の推移から顧みれば、そこからまた、古学期の『山鹿語類』の教育論、そして『謫居童問』の教育論へと展開発展してゆくのである。<sup>5</sup>

『修教要録』『力行三』では、まず総論的に、『孟子』の「五倫」と「教」、「庠序」等の学校による人倫教化の意義、『白虎通』の「三綱」より「父子は地に法り、……父は矩なり、度を以て子を教ふるなり。」等を示す。<sup>6</sup>教育への志向を表明する導入という意図が感じられるが、その体裁は、基本的には、典拠主義に立ち、古典とその解釈による教育説の集積にみえる。すなわち、その引用の意味と、

それらがその後の素行自身の教育方法論へ如何に連接し展開したかを評価しながら、あくまでこの時期の萌芽としての教育観として考察しなければならぬ。素行自身の本領域に関する直接的な意見はここでは殆ど表明されていないのである。それは主に丘濬（一四二〇年～一四九五年）の『大学衍義補』に則っている。しかしながら、『修教要録』の素行の教育論形成過程上の意味としては、発達段階への関心を志向する萌芽としての教育方法論が、陶冶性論などにも既にみえて教育論全体に関わって現れており、その点は拙論でも指摘した。<sup>7</sup>さらに本論では詳細を検討するが、子どもへの教育方法に関して、具体的・集約的に取り上げている部分である「力行三」内の「胎教」「子を教ふ」「通じて子弟を教ふ」の前後関係は、「齊家」に関する慣習・儀礼とそれに伴う倫理説である。

素行はそのため丘濬の解釈・記述を常に引くが、「丘文莊曰はく、人の子として親に事ふるには、固に當に其の孝を盡すべし。……孝にして敬せざれば孝に非ず。」<sup>8</sup>として、「子」としての倫理「子道」を述べる。陳澧の「子にして孝なれば父母必ず之れを愛す、婦にして敬なれば舅姑必ず之れを愛す。然れども猶ほ其の愛を恃んで命に於て或いは違ふ所あらんを恐る。故に逆らふ勿れ怠る勿れを以て戒と為す。」の引用に「子」の「五倫」解釈での位置付けが典型として現れている。一方、父母に過失がある時、子として如何に諫めるかという問題に関して、『礼記』『内則』から始まり、丘濬による朱熹の説を記した上で、素行はその諫め方はより具体的に未然の予防的な対処と過失の現れた時々の対応として実効的な面を強調した解

積を採っている。ここには、朱子説依拠に止まらない、より具体的な方法へ向かおうとする素行の方向性も窺えるところである。<sup>10</sup> 親子関係については、こうした子として父母に対する諫め方、子として「己が志を行」<sup>11</sup>うことの相克等について問題にし紙数を割くが、「孝」を逆に親が拒絶する場合などは、「中人の性の若きは、其の愛惡若し理を害することなくんば、姑く之れに順へ。」<sup>12</sup>を引くところにも、倫理重視の原則論とともに臨機応変な対応を採るべきという現実対応論の両点をあげる素行の含みをみる。

しかしまた、程伊川の「人の家に處するは骨肉父子の間に在り、大率情を以て礼に勝ち、恩を以て義を奪ふ。」<sup>13</sup>の言を引いている。あるいは、朱熹の『小学』『稽古』篇より、樂正子春の「天の生ずる所、地の養ふ所、ただ人を大なりと為す。父母全くして子を生み、子全くして之を帰す、孝と謂ふべし」<sup>14</sup>、続けて同書の公明宣による「孝」についての書物によらない実践としての学びという解釈の側面をここでも引く。<sup>15</sup> 倫理としての「子道」は「孝」であるべしという点のみが基準となり、自然の親子関係から、倫理としての親子関係への人為性・規範性を説くことを踏襲しており、子どもの年齢・発達の中での親子関係という視点はここでは取り上げられてこない。人倫の教化の文脈で、「父子の教が道路に著はるるなり。」<sup>16</sup>がみられる。

これに対して、「婦道」はさらに人為的關係にあり規範性に支配される。「丘文莊曰はく、子の父母に於けるは天性なり。而して婦の舅姑に於けるは天性の親に非ずと雖も、……其の孝を助成する所

以なり、亦天性の自然なり。」<sup>17</sup>とされる。「唐の鄭義宗が妻盧氏、略ぼ書史に涉り、舅姑に事へて甚だ婦道を得たり。」<sup>18</sup>と、教養面に言及するが、規範性の枠内に強く拘束されている典型である。

「兄長に事ふ」では兄弟関係が取り上げられる。親子関係と兄弟関係を対比して、『孟子』の「孟子曰はく、孩提の童も其の親を愛することを知らざるはなし、其の長ずるに及んでは、其の兄を敬することを知らざるなし。」<sup>19</sup>から記する。教育に関わつては、兄弟関係では、張横渠の「兄弟宜しく相好すべく、相学ぶことを要せずとなり。」の『小学』<sup>20</sup>嘉言篇内の解釈如何が注意されるが、素行は特に解釈を示していない。兄弟関係についても「孝」の側からの視点のみで、兄による教育等の観点は触れていない。<sup>21</sup>

「男女の別」も『大学衍義補』巻四十八に依拠するが、「丘文莊曰はく、……法度とは是れ即ち禮なり。」<sup>22</sup>「内則に曰はく、禮は夫婦を謹むに始まる」<sup>23</sup>として、「礼」の問題に集約するのとらえ方を採っている。素行は、丘濬の記述「易に曰ふ、天地ありて然して後に萬物ありて……男の陽にして女の陰に配合するときは夫婦たり。是に由りて父子を生じ、是に由りて君臣を成し、是に由りて叙て尊卑上下親疎の分を為す。此れ禮儀の由つて以て措く所なり。是を以て人君の治を為すや、必ず家を正すを以て本と為す。……禮を庸ひ以て徳教を天下に敷き、……男は男の禮を盡し女は女の禮を盡し、……是を以て孝敬を成し人倫を厚くし、教化を美しくし風俗を移せば、治平の基是に於てか立つ。三代の盛ん、牽ね是の道に循ふ。」という「齊家」観をここでも引くが、その後半は以下、古代の治平

が時代推移の中で乱れる経緯を辿り、「盛代の文明を昭かにす」という治政の源としての「齊家」を説くという歴史観を示している。<sup>24</sup>

子ども観並びにその教育観は、このような「齊家」観の延長にあるが、『修教要録』では構成的に「子道」は「子道」として位置付けられているに留まり、後年の『山鹿語類』のような「父子道」としての強い教育的な関心による関係論の中では位置付けられていない。しかし、萌芽としては、述べてきたように、引用説の中から、「父子」関係と「教」の意図を抽出しているのである。

さて、「義利」論を述べる素行は、「賄賂清廉」の項においては、「今案ずるに」と自説をかなり展開させているのを見ることが出来る。『建武式目』のような日本の文書をここで引用しているのも特徴的である。<sup>25</sup>そして「学熟し行練れざるの徒、賄賂私謁を受けずと雖も、必ず私曲奸邪あり。……人必ず学ばず勉めざれば偏心有り、故に其の言辞其の顔色其の容貌、美と云ひ、悪と云ひ、皆我が偏心を生じて、動もすれば報酬の事を為す甚だ謹むべきのみ。」<sup>26</sup>とする。この契機と方向は素行の『武教小学』へと関係するとみることが出来る。

『武教小学』は、父親の役割としての教育から始まり、『修教要録』に比して、既に『山鹿語類』「父子道」の観点が出ている。後半の女子教育の部分に於いて、「齊家」観が取り込まれている構成になっており、「夫婦の別」の段にも言及していた。<sup>27</sup>

## (二)「胎教」論を起点とする教育方法論

『修教要録』「力行三外編一」における「胎教・子を生む・子を教ふ・通じて子弟を教ふ」の項目の前後は、前に「男女の別 夫婦を謹む」が、後に「通禮 冠笄」が置かれて、夫婦関係から論じ、次に妊娠と「胎教」、そして「子を生む」の出産、続けて「子を教ふ」と「子弟を教ふ」通論へと向かい、その後に「通禮 冠笄」が置かれて、通過儀礼を含む冠婚葬祭他、慣例・儀礼という構成となっている。子どもの教育に関する「齊家」の中でのこうした子どもの成長に関わる順序性と各々の儀礼・規範の集成という特性を持っている。「子を教ふ」という本項での教育方法論の位置づけは、前述の「齊家」観と、子どもの成長に関する順序性と規範という特性の中で論じられる。素行のここでの子どもへの教育という観点に立つ所論とは、このような文脈で展開されてくる。それは『大学衍義補』の構成に影響されたものでもあるが、本節では、素行の子どもの教育方法としての教育方法論に関する問題関心が、いかなる典拠に求められているかを中心にみてゆきたい。

『修教要録』の当該項目は従って「胎教」をまず対象としている。『列女傳』の「胎教」説を記している。

列女傳曰はく、古者婦人子を妊娠ば、寝ぬるに側たず、坐するに邊らず、立つに蹕せず、邪味を食はず、割正しからざれば食はず、席正しからざれば坐せず。目に邪色を視ず、耳に淫聲を聴かず。夜は則ち瞽をして詩を誦し正事を道はしむ。此の如きときは、

生るる子形容端正にして才人に過ぐ。

子を妊むの時は必ず感ずる所を謹む。心物に感ずるときは、其の子の形音之れに肖る。故に妊者能く此れを謹むときは、生るる子形容端正にして才識必ず人に過ぐ。此れ之れを胎教と謂ふ。<sup>28</sup>

同じく『列女傳』にある文王の母、太任の例へ続き、「太任の性端一誠莊、惟だ徳之れ行ふ。其の文王を娠むに及んで、目に悪色を視ず、耳に悪聲を聴かず、口に教言を出さず。文王生れて明聖なり。太任之れに教ふるに一を以てして百を識る。卒に周の宗と為る。君子謂ふ、太任胎教を能くすることを為すと。」<sup>29</sup>を載せている。

ここに表明されている特徴は、①古代の理想としての周を規範とする政教観に拠ること、②家庭に知育に関わる教育者が存在すること、③母子の心理的影響関係、④母の日常的倫理行為に関わっている、⑤結果として期待されている要素は、「形容端正」「才識」「人に過ぐ」とする容姿と「才能」の卓越性を期待していること、⑥君主論の延長にあること、があげられよう。特に、⑤については、出生後も「太任之れに教ふるに一を以てして百を識る」という母子間の教育関係を指摘するとともに、「才識」の優秀性を評価するものとなっている。そして、「胎教」を一般化してとらえようとしている点である。これらの古典の主張が、素行にあって、段階的教育方法を述べる起点として評価されていることが重要である。『修教要録』の当該項が「胎教」の引用説の集積と言う形でここで始まることは、素行の教育論のその後の特性を考える上でも鍵になる点と評価される。ここは古典に説述される慣習・慣例としての事例紹介と

いう意味を超えて、その発達段階説への発展に向かう視点として看過できないものである。

後年の素行の教育論にあっては、「胎教」は繰り返し論じられる。そして、その内容趣旨自体に大きな変化や発展はみられない。明暦二年（一六五六年）中の『武教小学』は、「胎教」には触れないが、<sup>30</sup>古学期の『山鹿語類』の執筆に先立つ古学への転回前の万治三年（一六六〇年）から寛文元年（一六六一年）七月頃までの期間に書かれた「掇話」に「胎教」は二度触れられている。一つは、

人の心程移りよきものはあらず。善惡に就き邪心につき憂につき樂につき、時々に移るものなり。よくよく心得べし。しかれば胎教さへあれば、幼少の時より善に慣るる如く致さずしては叶ふべからざるなり。<sup>31</sup>

と、ある。いま一つは、質問に対して素行が応答する記述で、或る人の曰ふ、「古の胎教といふことはあることにな」と。

予云はく、胎教と云ふは出生致さざる已然より教ふることなり。天下の萬事胎教より出でざることなし。内習内閲して而る後にその事をなすは、皆胎教と云ふものなりと知るべきなり。<sup>32</sup>

と、答えており大きく評価をしている。ここで「内習内閲」の語があるが、これについては同じく明暦二年（一六五六年）の素行の著作『武教本論』において、学習とその成果の確認の両者の必要性を兵法の面から評価する記述として現れているのを見ることが出来る。<sup>33</sup> いずれにしても、「胎教」の教育的視点を拡大して解釈していることが窺われる。

古学期の『山鹿語類』（寛文三（五年）・一六六三（一六六五年））に至り、素行は、「父子道」の中で、発達段階説に対応した教育方法論を説くことになるが、発達段階説「教戒に節あり」の論に先立って「胎教并に師傳母を撰ぶ」論旨を述べている。「古は胎教と云へる事のありにけりとにや。」以下、『列女傳』を引き、続けて、

凡そ子既に母の胎内に感じては母の氣血を分けて己れが氣血とし、母の所感の善惡に感じてこれを以て己れが才質とす。故に婦人子を妊む時は、心の物に感ずる所を慎んで其の七情を節ならしむ。すべて母の所感の視聽言動思の間を不可出なれば、視ることきくことに付きて、心の感じ氣の動きをつつしみ、云ふ言葉のあわてさわいで内をうごかしめ、怒りせいて内に氣をたかぶらしむる、各々其の宜を失ふ也。其の身行住坐臥の時、胎内の子に不障、四支五體の屈伸を節にして、子に疵付きてそこなふことあらず。飲食をときなつて内にあたりそこなふべき食物を不飲食、平生翫ぶ處のことわざにも心の所感を善ならしめ、見聞して覚知するの理を正しからしむれば、内に七情の妄りに動ずる事なく、外に邪氣の内をやぶることあらざるを以て、出生するの子形容正しく、かたわなる事あらず、才質各々善に感じて人にまさるべし。是れを胎教と云ふ也。<sup>35</sup>

と、述べている。さらに素行は、「たとへばここに人あるを、奥室にかしづき入れて外事を不通ば、其の室の居所飲食、其の亭主の言行の外に、ものしることなきに同じ。ここを以て云はば、婦人子をはらんで、其の胎教尤も可慎也。」<sup>36</sup>としており、胎教にあつても、

社会性重視の観点を明確に示している。

その後の『謫居童問』（寛文八年・一六六八年）に至ると、考察してきたように、「養を本として其の教をくはしくする」方法が説かれ、素行の子どもへの観察・関心と医方家の影響がみられる生理的な発達を詳述する発達段階説に則した教育課程・方法論が展開されるが、改めて、その発達段階説の最初の部分の記述に注目してみたい。「以前に云ふごとく、母の胎教あり、況や出生して撫育教導詳ならずんばあるべからず。」<sup>38</sup>とある。そして「初めて母の胎内を出でて寒風尤もおそるべし。」<sup>39</sup>から発達段階説に入つてゆく。ここで素行が「以前に云ふごとく」としているのは、どの記述を指すのかといえ、『謫居童問』の冒頭には、「人生れて学ぶに在らざるといふ事無し。幼少より人となるまでを考ふべし。……古は子すでに胎内にやどる時、母を別家に置き、側の者みやづかへの輩までえらび、飲食・衣服より其のなすわざに法則を定め、胎教を立て生れながら形容端正ならんことを求む。是れ学と云ふべし。心を付けざるがゆゑ是れを学と知らざる也。」<sup>40</sup>としており、意図的教育に先立つ無意図的教育の形成について触れている。「胎教」論は、このように発達段階説の初期に位置付けられ、養育・教育の重要な起点であり、素行教育論の特性に関わる視点として大きく関係しているといえる。

素行晩年の貞享二年（一六八五年）においても、「胎教」については述べられており、「二十二日夜、周易傳序・本義序を講ず。藤介・岩之助・清介・貞之進席に在り。列女傳第一を読む。肖化。太

任は文王の母なり。胎教を存す。人生れて父母に肖るは、皆その母物に感ずるの故に、形音これに肖る。文王の母これを知ると謂ふべし。<sup>41</sup>」としている。「肖化」の事由として、自然に母の善良の心に似るように陶冶されるとする見解を、嗣子藤介や津軽高豊等の内弟子に表明していることになる。

「胎教」に続く、出産に関わる儀礼の記述である『修教要録』「子を生む」も『大学衍義補』巻四十九に則るその抜粹と考えられるが、儀礼の規範としての類例を中心に記される。前述した『山鹿語類』「胎教并に師傅母を撰ぶ」の中でも、子が生まれるにあたっての礼法の記述が述べられており反映されている。<sup>42</sup>

「子を生む」では、『礼記』「内則」の「妻將に子を生まんとするときは、月辰に及んで側室に居り、夫は、人をして日に再び之を問はしむ。作すことあれば自ら之を問ふも、妻敢へて見ず、姆をして衣服して對へしむ。子生まるるに至つて、夫復た人をして日に再び之を問はしむ。」並びに、朱熹等の解釈を載せる。<sup>43</sup>「内則に曰はく、子生まるるときは、男子は弧を門の左に設け、女子は帨を門の右に設く。三日にして始めて子を負ふ。男は射しめ、女は否。方愆曰はく、……古の人は男女の生を重んじ、又男女の別を重んず。特に弧帨を見るのみに非ず。<sup>44</sup>」「凡そ子を接するには日を擇ぶ。……鄭玄曰はく、凡そ之れを接ふことは三日の内なりと雖も、尊卑必ず皆其の吉なるを選ぶ。輔廣曰はく、父子の氣未だ嘗て相接せずんばあらず。生れて三日にして、又禮を以て之れを接す、是に於て至れりと為す。丘文莊曰はく、今世の人家に子を生みて三日にして親姻を

會す、亦古人子を接ふの意なり。異に孺子の室を宮中に為り、諸母と可なる者とを撰び、必ず其の寛裕慈恵、温良恭敬、慎んで言寡き者を求めて、子の師たらしめ、其の次を慈母と為し、其の次を保母と為す、皆子の室内に居らしむ。他人は事なければ往かず。……大夫の子は食母あり、士の妻は自ら其の子を養ふ。<sup>45</sup>」を引くが、古典の礼法における教育的役割の類例を示すという意義の提起にとどまるといえ、古典の礼法自体の踏襲は意図していないことが予想され、それは『山鹿語類』において同様であることから了解される。命名の儀礼等に加えて、教育係が用意される環境は理想態として示しながら、実際は各々の家の状況に応じた教育を求めるものといえる。

### (三) 教育方法論・教育課程論の要素と特性

『修教要録』の「子を教ふ」は『大学衍義補』巻五十の抜粹である体裁をなしているが、「子を教ふ」は、子どもの成長に関する順序に従つての記述を意図していることから、最初に取り上げられるのは、子どもの「随年教法」に属する教育課程論である。冒頭、『礼記』「内則」の説を取り上げる。

内則に曰はく、子能く食を食ふときは、教ふるに右の手を以てし、能く言ふときは、男は唯し女は愈す。六年にして之れに数と方の名とを教ふ。七年にして男女席を同じうせず、食を共にせず、八年にして門戸を出入し、及び席に即き飯食すること必ず長者に後る。始めて之れに讓ることを教ふ。九年にして之れに日を数ふ

ることを教ふ。十年にして出でて外傳に就き、外に居宿し、書計を学ぶ、禮は初に帥ふ。朝夕に幼儀を学び、簡諒を請ひ肆ふ。<sup>47</sup>

本説は、子どもの教育方法・教育課程に関わる「随年教法」の代表的な古典説であり、素行の教育論の展開にあっても発想の起点と評価されうるものである。その意義論に相当する解釈としての、

顔之推曰はく、子を教ふること、嬰孩は其の始を謹むに在り。

子の初めて生るるや。之れをして尊卑長幼の禮を知らしめずんばあるべからず。若し父母を侮罵り兄妹を毆撃するに、父母訶禁を加へずして反つて笑つて之れを奨めば、彼れ既に好悪を辨へず、遂に當然なりと謂ふ。其の既に長ずるに及んでは習已に性と成る。乃ち怒つて之れを禁ずるとも復た制すべからず、残忍悖逆至らざる所なし。此れ蓋し父母に深識遠慮なくして、微を防ぎ漸を杜ぐ能はず、小慈に溺れて其の惡を養ひ成すの故なり。<sup>48</sup>

を續けて引用することも踏まえた上で、丘濬の解釈を取り上げて、丘文莊曰はく、内則に言ふ所の子を教ふるの法は、能く食ひ能く言ふときより始まり、其の叙年六年よりして以て七十に至つて後に止まる。而るに此に采る所十歳までに止まるは、陸氏の曰はく、十年以後は学ぶことあつて教なし、蓋し外傳に就いて以後は則ち其の学ぶ所の者師友に属して父兄の家教に繋らざればなりと。<sup>49</sup>

として、本来古典としての説では生涯にわたることを対象とするところから、十歳までの家庭での教育を対象とした子どもを対象とする教育論としてとらえ直す観点を明らかにしているが、素行もそ

の点を意図的に取り上げて記載していると考えられる。

また「内則」の「女子十年にして出でず、姆婉聽従することを教ふ。麻枲を執り、絲繭を治め、紵を織し紉を組む。女事を学んで以て衣服を共し、祭祀を覲て酒漿籩豆菹醢を納れて、禮もて奠を相助く。十有五年にして笄し、二十にして嫁す。<sup>50</sup>」を再び採り、女子についての当説を記す。

以降は、教育課程論から離れ、一般的な子どもの教育方法に関しでの説述を並べて取り上げるが、その教育方法の意義が関連するとの素行の評価もあつての記載と考えられる。

曲禮に曰はく、幼子には常に誑すなきことを視す。童子は裘裳を衣ず、立つときは必ず方を正し傾き聴かず。<sup>51</sup>

劉彝曰はく、幼子の性は純明にして天に自ひ、未だ外物の其の好惡を生ずる者あらず、学ぶ所なくしては成るべからず。金の鎔に在るが如く、惟だ人の範する所のままなり。泥の鈞に在るが如く、唯だ人の模する所のままなり。故に之れに視すに誠信を以てするときは、誠信其の心に篤し。之れに視すに詐偽を以てするときは、詐偽其の心に篤し。模範の初め貴んで其の正を得るときは、五事之用、誠より出でて道に適はずといふことなし。故に曰はく、幼子には常に誑すなきことを視すと。<sup>52</sup>

この引用の二つの説を取り上げるにおいて、「幼子」の「童子」との段階の違いが記され、「誑すなきこと」をここで強調するのは、「幼子」を価値的には白紙説的な捉え方をしている点がみられる。それを、「性は純明」「天にしたがう」と表現していることに注意が



必要である。また、「成童は八歳以上を謂ふ<sup>53</sup>」との注も紹介している。

ここでの教育の意義が子どもの早期からの習慣形成に求められていることは次の引用からも明らかである。

張横渠曰はく、小児を教ふるには、先づ安詳恭敬ならんことを要す。今世学講ぜず、男女幼より便ち驕惰にして壞り了る、長ずるに到りて益々狂狠なり。只だ未だ嘗て子弟の事を為さざるが為に、則ち其の親に于て已に物我ありて肯へて屈し下らず。病根常にあり。又居る所に従つて長じ、死に至るまで只だ舊に依る。人の子と為りては即ち洒掃應對に安んずること能はず、朋友に接りては則ち朋友に下ること能はず、官長あるときは官長に下ること能はず、宰相と為りては調ち天下の賢に下ること能はず、甚しきは則ち私意に徇ひ義理都て喪ぶるに至るも、也た只だ病根去らずして居る所接る所に随つて長ずるが為なり。<sup>54</sup>

具体的な教育方法を引用する部分もみられる。

楊文公が家訓に曰はく、童穉の学は記誦に止まらず、其の良知良能を養ふに、常に先人の言を以て主と為すべし。日に故事を記し、今古に拘らず、必ず先づ孝弟忠信禮義廉恥等の事を以てす。……只だ俗説の如く、便ち此の道理を曉して、久々に成熟せば、徳性自然の若くならん。<sup>55</sup>

ここで、①暗記型の学習も否定していない、②それに加えて優れた古典の言を学習内容と考える、③俗説としての経験的な習慣形成の教育説を評価する観点がみられることも注意したい。またここで

「其の良知良能を養ふ」を採り上げながらも、本有觀念の解釈ではなく、後天的な教育・学習の問題に焦点化して紹介していることが看取される。

素行の「子を教ふ」の関心が、「随年教法」の関心から取り上げられていることをみた。照応するように、その締めくくりは、趣旨を同じくする『文公家禮』の教育課程論である。

家禮に曰はく、子能くを飼を食ふときは、教ふるに右の手を以てし、子能く言ふときは之れに教へて自ら名いはしめ、萬福安置を唱喏せしむるに及ぶ。稍や知あるときは、之れに教ふるに尊長を恭敬することを以てし、尊卑長幼を識らざる者あれば、嚴に訶禁す。六歳にして之れに数と方の名とを教へ、男子は始めて書字を習はしめ、女子は始めて女工の小なる者を習はしむ。七歳にして男女席を同じうせず、食を共にせず、始めて孝經論語を誦せしむ。女子と雖も亦宜しく之れを誦すべし。七歳より以下は之れを孺子と謂ひ、早く寝ね晏く起き、食するに時なし。八歳にして門戸を出入し及び席に即きて飲食するに、必ず長者に後る。始めて之れに教ふるに謙讓を以てす。男子は尚書を誦み、女子は中門を出でず。九歳にして男子は春秋及び諸史を誦し、始めて之れが為に講解して義理を曉さしむ。女子にも亦之れが為に論語・孝經及び列女傳・女戒の類を講解して略ぼ大意を曉す。十歳にして男子出でて外傳に就き外に居宿す、詩・禮を読み、傳之れが為に講解し、仁義禮智信を知らしむ。是れより以往は以て孟・荀・揚子を読み博く群書を觀るべし。凡そ読む所の書は必ず其の精要の者を

撰んで之れを読む。其の異端にして聖賢の書に非ざるものは、傳宜しく之れを禁じ、妄りに觀て以て其の志を惑亂せしむることなからしむべし。書を觀ること皆通じて始めて文辭を學ぶべし。女子は則ち教ふるに婉婉聽從及び女工の大なる者を以てす。未だ冠笄せざる者は鶏鳴いて起き、総角し面を齷ひ、以て尊長に見え長者を佐け、祭祀を供養するときは酒食を執ることを佐く。若し既に冠笄するときは、皆責むるに成人の禮を以てし、復た童幼を言ふを得ざらしむ。<sup>56</sup>

素行は、重ねて丘濬の教育への関心を受ける形で、ここでも丘濬の解釈を採っている。

丘文莊曰はく、書に曰ふ、「生るる子の若し、厥の初めて生るるに在らずといふこと陋し」と。禮に曰はく、「未発に禁ずる、之れを豫と謂ふ」と。朱子亦曰はく、「子の初めて生るる、其の初めて教ふる所慎まずんばあるべからず」と。所謂初めて教ふる所を慎むとは、則ち是れ豫じめ未発の初を教ふるなり。蓋し人の初生童孺の時は元氣未だ漓からず、天真未だ散ぜず、善性未だ斷せず、情竇未だ開けざるを以て、此の時に當つて之れを開導するときは順にして易し。此の時を過ぎて之れを防閑するときは逆にして難し。<sup>57</sup>

教育方法に関わる素行の注目点も、かくして、発達の段階への関心の表明が明確にあらわれている記述として示されている。

子どもへの教育方法に焦点化しながら、素行は、「春秋穀梁傳に曰はく、子既に生れて、水火を免れざるは、母の罪なり。羈貫成童

の師傳に就かざるは、父の罪なり。」<sup>58</sup>の説を並置しているが、ここには、父親と母親の教育の役割について、家庭教育では母親の養育の役割を主としている説を紹介していることになるが、前述のように『武教小学』から『山鹿語類』へと父親の教育の役割も説かれるに至る。『修教要録』においてはまた、父親の家庭教育期後の教育についての責任を父親に求める。素行が『修教要録』において、「子を教ふ」に続けて「通じて子弟を教ふ」で取り上げているのは、主に学校教育の必要性である。

王制に、小学は公宮の南の左に在り、大学は郊に在り。公卿の太子、大夫元士の適子をして十有三年にして始めて小学に入り、小節を見、小義を踐ましむ。二十にして大学に入り、大節を見、大義を踐ましむ。故に小学に入りては父子の道長幼の序を知り、大学に入りては君臣の義上下の位を知る。故に君と為つては君たり、臣と為つては臣たり、父と為つては父たり、子と為つては子たり。<sup>59</sup>

ここで取り上げられる学校論であるが、子どもの成長に即して家庭教育後の教育機会として位置させていることに特質がある。一方で、素行が教化政策の一環としての文脈で扱う学校論がある。これに對比してみると、ここで述べられる学校論はたとえ同一の古典説の引用であったとしても、今まで述べてきた子どもたちの教育方法の延長にある学校での教育機会と方法を紹介する文脈であり、それゆえの再度の制度の紹介でもあり、それに伴う学校での教育方法の紹介であるといえる。すなわち、学校制度論に比重があるのではなく、

学校における教育方法の考量についてが主題となっており、解される。さて、ここでの「王制」の趣旨からすれば、「小学」、「大学」それぞれの入学年と教育目的が記されている。「小学」では、家庭にも関わる倫理を知り、「大学」では君臣関係の倫理を知ること、家庭・社会両者にあつて倫理を実践することを目指している。続けて古代の学校の理想態として周の教育組織・教員と教育内容がやや詳しく紹介されている。<sup>60</sup>

また、例えば、

弟子職に曰はく、先生教を施すときは、弟子是れに則り、温恭にして自ら虚しく、受くる所是れ極む。善を見れば之れに従ひ、義を聞けば則ち服す。溫柔孝弟にして驕つて力を持つこと母れ。志は虚邪なく、行は必ず正直にす。遊居に常ありて必ず有徳に就く。顔色整齊、中心必ず式あり。夙に興き、夜に寐ね、衣帯必ず飭す。

朝に益し暮に習ひ、心を小むこと翼々たり、此に一にして懈らず、是れを学則と謂ふ。少者の事は、夜に寐ね蚤に作き、既に拵して盥漱し、事を執りて恪むことあり、衣を攝のへ盥を共ふ。先生乃ち作きて、盥に沃ぎ盥を徹す、汎く拵し席を正し、先生乃ち坐す。出入には恭敬、賓客を見るが如し。危坐して師に郷ひ、顔色作ふことなし。<sup>61</sup>

と、されているように、学校での教育方法が紹介されている。教師と学習者の関係・態度を中心に、弟子としての学習態度・規範が示されている。類例は多い。<sup>62</sup>

少儀に曰はく、人生れて十歳を幼と曰ふ、学ぶ。二十を弱と曰ふ、冠す。三十を壮と曰ふ、室あり。四十を強と曰ひ、而ち仕ふ。五十を艾と曰ふ、官政に服す。六十を耆と曰ふ、指使す。七十を老と曰ひ、而ち傳ふ。八十九を耄と曰ふ。悼と耄とは罪ありと雖も、刑を加へず。百年を期と曰ふ、頤ふ。<sup>63</sup>

ここでは、再び生涯としてのとらえ方が記されており、十歳を「幼」と呼び、始めて学ぶ時期と規定し、また、七十歳を「老」と呼称して、「傳ふ」として、「家事を伝えて子孫に任す」と、「齊家」の最終的な継承期と規定する『礼記』『曲禮』の説を紹介する。また「悼」は七歳であるとして、「耄」とともに、罪があつても刑に及ばないとし、それは「幼を愛して老を尊ぶ」趣旨からであるとする。「通じて子弟を教ふ」の結びは、『小学』『善行』篇にもある呂榮公の逸話を記している。

呂榮公、……而して申國夫人性嚴にして法度あり、甚だ公を愛すと雖も、然れども公に教へて事々規矩に循ひ踏ましむ。甫め十歳にして祁寒暑雨にも侍立して日を終へ、……焦先生……嚴毅方正なり。正献公之れを招き延いて諸子を教へしむ。諸生小しく過差あれば、先生端坐して召して與に相對し、日を終へ夕を竟ふるまで之れと語らず。諸生恐懼畏伏すれば、先生方に略ぼ辞色を下す。時に公方に十餘歳、内には則ち正献公と申國夫人との教訓此の如く之れ嚴なり、外には即ち焦先生の化導此の如く之れ篤し。故に公の德器成就して大いに衆人に異なり。公嘗て言はく、人生れて内に賢父兄なく、外に嚴師友なくして、而も能く成ることあ

る者は少しと。<sup>64</sup>

このように、『修教要録』「通じて子弟を教ふ」では、「齊家」における親の教育に延長する学校の教師による教育への継続と、双方の教育の意義を位置付ける記事を取り上げて、その重要性を主張する体裁を採っているのである。

## (結)

『修教要録』執筆時点での子どもへの教育という関心は、引用説の集積の体裁ではありながら、「胎教」説、年齢段階、また発達に即しての家庭教育、そして学校教育の必要性和教師による教育方法論へと意図的に構成されている。素行自身の教育方法論は、述べられているとはここでは見難いが、しかし、教育論への関心の起点として、「子を教ふ」は、子どもの随年教法からはじめ、課程論をもつて意図的に結んでいる。丘濬の教育的意図を強調しているとみえる。

本論では、引用の構成自体によるその意図を考えてきた。なお、「通じて子弟を教ふ」において、学校における教師の教育方法論や教材の意味などを考量している引用がみられ、それが後の著作に影響関係を持つことが窺われる点もある。この詳細は引き続き検討の対象としたい。文中、多くの引用の記述の仕方において取捨選択が行なわれている。解釈者各々、そして素行が置きたかった力点などが比較考察から判明するところもあり、重要な言説の幾つかに関

して、比較検討をさらに進める意味があると考えている。

本論においても、『修教要録』から『武教小学』、そして『山鹿語類』さらに『謫居童問』への形成過程の考察を試みているが、なお、その詳細の検討が必要であり、次の課題と考えている。

## (註)

- 1 拙稿「山鹿素行の教育論形成過程に関する考察——『修教要録』における陶治性論並びに学校・教師・学習論を中心に——」(工学院大学研究論叢五二—二号)二〇一五年二月・五〇—六三頁。
- 2 修教要録・広瀬豊編『山鹿素行全集思想篇』(岩波書店・一九四〇—一九四二年)三卷・二一五—三二七頁。
- 3 これに関する『修教要録』の著作の位置等は、既に拙稿「山鹿素行の教育論形成過程に関する考察——『修教要録』における陶治性論並びに学校・教師・学習論を中心に——」(前掲)で指摘しているので参照されたい。
- 4 武教小学・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一卷・四八—五二頁。
- 5 拙著『教育思想の研究——山鹿素行の教育論の考察を中心に——』(酒井書店・二〇一三年十二月)一三五—一四七頁参照。
- 6 修教要録・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)三卷・二二五—二二七頁。
- 7 拙稿「山鹿素行の教育論形成過程に関する考察——『修教要録』における陶治性論並びに学校・教師・学習論を中心に——」(前掲)参照。
- 8 修教要録・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)三卷・二二八頁。
- 9 同前三卷・二一九頁。
- 10 同前三卷・二二三頁。「朱子の意固に是なり、但し幾の字の訓に於いて甚だ親切ならず。」とあり、以下解釈が付されている。
- 11 同前三卷・二二三〇頁。
- 12 同前三卷・二二二頁。
- 13 同前三卷・二二〇頁。
- 14 同前三卷・二二四頁。
- 15 同前三卷・二三五頁。小学・宇野精一『小学』(新釈漢文大系)明治書院・一九六五年・一九〇—一九四頁参照。

- 16 修教要録・(前掲)三卷・二四一頁。  
 17 同前三卷・二二九頁。  
 18 同前三卷・二三四頁。  
 19 同前三卷・二三四頁。  
 20 同前三卷・二四三頁。同じである必要はないという意。朱熹は善からざるところを学ぶべきでないと解釈している(小学・『小学』(前掲)三・一四頁参照)。また、我が子の生命より兄弟の生命を優先した事例を後継を失った点も絡めて例示し、「自ら吾が兒を棄つべきのみ」との判断を取り上げるが、ここでは教条主義的な倫理規範優先の「子ども」観に終始する(修教要録・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)三卷・二四四頁)。  
 21 修教要録・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)三卷・二四五頁。  
 22 同前三卷・二四七頁。  
 23 同前三卷・二五一頁。  
 24 同前三卷・二五二―二五四頁。  
 25 同前三卷・二九九―四〇三頁。  
 26 同前三卷・四〇二―四〇三頁。  
 27 武教小学・(前掲)一卷・四九五―四九七頁。  
 28 修教要録・(前掲)三卷・二五五頁。  
 29 同前三卷・二五五頁。  
 30 門人編纂という点にも理由はあるかも知れない(武教小学・序・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一卷・四八二頁)。  
 31 掇話(子丑)・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一一卷・三四五頁。  
 32 同前一卷・三五五頁。  
 33 武教本論・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一卷・五三一頁。  
 34 『教育思想の研究―山鹿素行の教育論の考察を中心に―』(前掲)一四一―一四二頁参照。  
 35 山鹿語類・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)六卷・二八〇―二八一頁。『修教要録』に取り上げられる「胎教」論の特色に、「結果として期待されている要素は、「形容端正」「才識」「人に過ぐ」とする容姿と「才能」の卓越性を期待していること」を挙げたが、『山鹿語類』の本説においても「形容正しく、かたわなる事あらず、才質各々善に感じて人にまさるべし」とあり、君主の後継者論の枠組み・性格に支配されている。  
 36 山鹿語類・(前掲)六卷・二八一頁。  
 37 拙稿「山鹿素行の教育論形成過程に関する考察―『修教要録』における陶冶性論並びに学校・教師・学習論を中心に―」(前掲)参照。拙著『教育思想の研究―山鹿素行の教育論の考察を中心に―』(前掲)一四四―一四五頁参照。「養を先にして教を後にする」意義を強調している。  
 38 謫居童問・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一二卷・二六頁。  
 39 同前一二卷・二七頁。  
 40 同前一二卷・一五―一六頁。  
 41 章數附(貞)・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一一卷・六〇七―六〇八頁。  
 42 山鹿語類・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)六卷・二八二―二八四頁。  
 43 修教要録・同前三卷・二五六頁。  
 44 同前三卷・二五七頁。  
 45 同前三卷・二五八頁。  
 46 「凡そ子に名づくるには、日月を以てせず……」以下、『内則』の引用(修教要録・同前三卷・二六〇頁)。古例での教育係につき、「鄭玄曰はく、異に孺子の室を為るといふは、……子の師は教ふるに善道を以てする者なり。慈母は其の嗜欲を知る者、保母は其の居處を安んずる者なり。士の妻は之れに食乳せしむるのみ。他人は事なければ往かざるは、児の精意微弱にして將に驚動せんとするが為なり。……司馬溫公曰はく、凡そ子始めて生るれば、必ず之れが為に乳母を求め、必ず良家の婦人の稍や温謹なる者を選ぶ。」として述べている(修教要録・同前三卷・二五八―二五九頁)。  
 47 修教要録・(前掲)三卷・二六二頁。  
 48 同前三卷・二六二―二六三頁。  
 49 同前三卷・二六三頁。  
 50 同前三卷・二六三頁。  
 51 同前三卷・二六三頁。  
 52 同前三卷・二六三―二六四頁。  
 53 同前三卷・二六四頁。  
 54 同前三卷・二六四―二六五頁。  
 55 同前三卷・二六五頁。  
 56 同前三卷・二六五―二六六頁。また、これに関わって、「丘文莊曰はく、愚嘗て文公家礼を擧括して以て儀注を為る。……」(修教要録・同前三卷・二六一頁)と、丘濬が『文公家禮』の註釈に力を注いだ記事もみられる。  
 57 修教要録・(前掲)三卷・二六七頁。  
 58 同前三卷・二六八頁。  
 59 同前三卷・二六八頁。  
 60 同前三卷・二六八―九頁。

64 63 62 61  
同前三卷・二六九〜二七〇頁。  
同前三卷・二七一頁他。  
同前三卷・二七〇頁。  
同前三卷・二七八〜二八四頁。小学・『小学』「善行」篇（前掲）三六六  
〜三六九頁参照。

（うちやま むねあき 本学教授）

